CPD（Continuing Professional Development）

株式会社ＮＴＴファシリティーズ総合研究所
ＥＨＳ＆Ｓ研究センター　研究アドバイザー
高草木明

SHASE－CPD

私は、ミレニアムの 2000 年 5 月に空気調和・衛生工学会（SHASE）の理事（2002 年 5 月まで）に就任し、事業担当となった。

世紀末であり、「学会アクションプラン 21」が策定されることになり、当然、私も事業理事として参加した。これを検討する中で、私は HASS を SHASE-S（スタンダード）と改称、新たに SHASE-G（ガイドライン）、SHASE-M（マニュアル）の制定を提案した。これとともに副会長からのご指示で、空気調和・衛生工学会としての CPD の企画に携わった。CPD は土木学会と技術士会が先行していた。これらを参考に SHASE－CPD システムの原案を作成した。

CPD なるものを知る数か月前、会社（NTT 建築総合研究所、現・NTT ファシリティーズ総合研究所）の仕事の関係でイギリスの大手コンサル会社の日本法人に勤務する日本人の若い人と知り合った。何かの折の雑談で、彼の勤務する会社の社員研修のシステムを教えてもらった。それは、自分で計画して社外の講演などを聴講し、それにあてた時間でポイントを得る。一定期間に決められたポイントを取得することが義務となる、というシステムなのだという。当然、研修実績を会社に提出するので記録が残る。なるほど、と思った。後日知った土木学会や技術士会の CPD システムは同じようなもので､再度なるほどと思った。

学会活動や論文などの記録

2002 年 5 月、空気調和・衛生工学会通常総会で理事を退任、しかし会長指名により企画委員会委員として標準化運営委員会委員、新規格体系委員会委員とともに CPD 推進委員会委員を務めることになった。

この年の 6 月には、NTT 建築総合研究所の取締役に就任している。8 月には、日本建築学会賞（論文）に応募。9 月には、空気調和・衛生工学会大会（九州）でのワークショップで企画委員会委員の立場からパネラーとして意見を述べたりしている。11 月には、韓国で講演をした。建築学会等にいくつかの論文も提出しているし、「建築雑誌」その他に記事を書いたりもしている。技術士試験委員を務め、また大学院で非常勤講師を務めたりしている。多忙な日々だったことを覚えている。

私は、自分のこういった活動や発表した論文等を正確にかつ子細に、しかも速やかに記述することができる。なぜなら 1972 年に社会に出て以来の論文発表や学会等の活動記録があるからだ。

若いころは記録すべき実績も少ないし、日々のスケジュールは手帳が無くても記憶で済む。

Copyright © 2016 NTT Facilities Research Institute Inc.

手帳を持つようになったのは社会人 10 年目（1982 年）からだった。1985 年からは記録がやや詳しく、そして 1989 年からはだいぶ詳しくなる。

今は記憶力が衰えて、手帳（スマホとはいかない）が手放せないが、記載すべきこともだんだん少なくなってきて、そのうちスケジュールなど、多少ボケてきても憶えきれてしまうようになるのだろう。

記録の習慣の契機

さて、私の記録が詳しくなるのは、1989 年からのことだ。この年、技術士受験申込書を書いた。当時はこの申込書の経歴欄の書き方が口頭試問のために非常に重要といわれた。そのころまで私はズボラで、いつ係長になったかというような会社での経歴さえ記憶がおぼつかない。人事に問い合わせることも躊躇われる。担当した設計の正確な期間などもなかなか分からない。受験申込書作成に思わぬ時間がかかり、大いに反省した。

この 7 年前（1982 年）から手帳を持つようになってはいたが、記憶に頼ってあまり使わなかった。その 3 年後、会社で何かと気を使うポジションに就いてからは手帳をスケジュール管理に使うようになったが、仕事の実績を記録しようという発想はなかった。しかし、この反省がきっかけで手帳へのメモを増やした。手帳は今も全て保管している。

1993 年に学位論文を提出したのだが、これには経歴とともに、これまでに執筆した論文、報文等の全てのリストを付けるべきものと早とちりした。私は当時すでに 40 代半ばで、学位論文のための原著論文は 4 本しかなかったものの、大会論文や専門誌の記事などはかなりの数にのぼった。しかし、その記録はほとんど無い。またしても大いに反省し、これを機会に建築学会の図書室などを使い、ほぼ完全なリストを作った。その後、学位論文には専門誌の記事などは不要と分かり、無駄な作業をしたことになったが、このリストはその後の私の実績自己管理（独自 CPD）の核のようになった。

1998 年から、国士舘大学の大学院で非常勤講師を務めることになった。大学での資格審査のために各論文の概要（日本語）をつけた論文リストを求められた。論文は 7 本に増えていた。黄表紙の論文概要は英語なので、これもけっこうな手間だった。これ以降、論文が掲載される度に日本語の論文概要をわざわざ書いて記録してきた。年に 1 本か 2 本、最多で 3 本、たいした負担ではない。この時期には一気に論文数が増えた。この記録は 2002 年に日本建築学会賞（論文）に応募するとき、応募論文梗概執筆に大いに役立った。受賞できるかどうか分からない学会賞応募のために大きな労力を投ずる気力はなかなか湧かないが、材料が揃っていれば応募作業は大きな投資ではない。ダメモトを気軽に実行できる。

かくして、私が学会の CPD に関わるようになった 2001 年頃には、私流の私だけのための CPD が、それと意識しないままにほぼ確立していた。

CPD 関係の活動の展開

Copyright © 2016 NTT Facilities Research Institute Inc.

多忙だった 2002 年には、設備系 3 学協会共催の「建築設備士試験準備講習委員会」の副委員長に就任（2003 年には委員長、2004 年には再度副委員長）している。これは、空気調和・衛生工学会から推薦されたもので、その理由は、私が理事時代 CPD に深く関わったことによる。

同じ理由で、2004 年から、建築設備士 CPD プログラム認定委員会（事務局：建築技術教育普及センター他）委員、2009 年からつい先ごろまで、建築設備士 CPD 審査委員会（事務局：同）の委員長を務めてきた。

日本工学会の CPD 協議会（当初は PDE 協議会）「ECE プログラム委員会」のメンバーになったのは 2007 年のことだった。これも空気調和・衛生工学会を通じての参加で、今年 3 月まで続けた。

今も、建築設備技術者協会（JABMEE）の CPD 認定委員会委員長（2015 年から）を務めている。また、建築設備士関係団体 CPD 協議会（空気調和・衛生工学会、電気設備学会、建築設備技術者協会、日本設備設計事務所協会、建築技術教育普及センター）の委員も継続している。2001 年以来の空気調和・衛生工学会での CPD との関わりは、このように今も尾を引いている。

因みに、空気調和・衛生工学会理事時代以来の、標準化関係の委員会委員は断続的に続け、今もガイドライン・マニュアル担当などのメンバーとなっている。委員会報告のいくつかをレビュー担当するなど、私にとっての CPD の一つである。

CPD 実績活用―行政機関の活用と個人の活用

国土交通省は、官庁営繕事業に係る設計／工事監理業務の受注者選定に際し、建築 CPD の情報提供制度（日本建築士会連合会、日本建築家協会、建築設備士関係団体 CPD 協議会、建築技術教育普及センターなど）の CPD 実績を評価する方針を決定し、2008 年 5 月に国土交通省大臣官房営繕部整備課長から、各地方整備局等宛てに通達が出ている。

CPD 実績の活用は、都道府県、政令指定都市でも 2012 年に急増、以降も増加しつつある。建築 CPD 情報提供制度の認定プログラム件数、参加者数とも増加しつつある。建築設備士 CPD は、残念ながらやや低調である。CPD 実績活用が拡大すれば、CPD は更に普及することだろう。

このような公的に実績と認めてもらおうという CPD では、もちろん我流の CPD は通じない。公的制度における CPD は、原則として本来業務の実績は評価対象ではなく、それ以外の能力開発に割いた時間が評価尺度となる。また、専門資格取得のための受験準備講習受講などの時間は対象外である。

例えば、公共建築の設計技術力は、主に設計業務の経験と担当者の所有資格で評価される。CPD はこれらと重複しない新参の評価観点である。設計の実績や資格取得に関わる努力が CPD ポイントの対象外になるのは、評価が重複しないようにということなのであろう。

公的評価ということを考えなくても、技術的な本来業務の実績に評点をつけるのはきわめ

Copyright © 2016 NTT Facilities Research Institute Inc.

て難しい。昔、SHASE-CPD システムの原案を作ったとき、これには苦心した。当時、CPD 情報提供制度など考え及ばなかったころ、学会理事などの間に本来業務の実績を CPD 評価に加えるべしという意見が強く、私もそう思っていたので、かなり強引に点を与えるようなものになった。

CPD の本義に照らせば、評点よりも記録とそれに基づく自己啓発の管理に意義があると思う。

私の我流では、自分の仕事の実績を記録し管理するのが CPD である。管理であるから、PDCA サイクルを適用できる。これまでの実績を眺めると、自ずと今後の目標がみえてくる。私の場合、大学への転職（2005 年）もこの自己管理の一環（ACT）だったといえないこともない。この時の教員資格審査のための資料作成は、厚紙に論文実績を手書きするという昔からの奇妙な慣習はともかく、その他は全て私的 CPD のコピペで簡単に済んだ。

APEC エンジニアや認定ファシリティマネジャーなど資格維持に所定の CPD が必要とか、行政機関に CPD 実績証明書を提出しなければならないといった事情が、現在にも将来にもなければ、自由な個人 CPD も自己啓発に有効なのである。若い技術者には、若いうちからの何らかの CPD を勧めたい。資格や学位の取得なども個人 CPD には当然加えるべきものである。

齢を重ね、プロフェッショナル・ディベロップメントを卒業すれば、昔を懐かしみたくもなる。これにも活用できる。CPD 記録は、仕事に関する思い出のアルバムとなるのである。私の個人的 CPD 記録には、最近では、掲載された論文題目（今もまだ少しある）の横に孫の写真が貼り付けられたりしている。

(2016年7月1日　高草木明)

※掲載された論文・コラムなどの著作権は株式会社 NTT ファシリティーズ総合研究所にあります。これらの情報を無断で複写・転載することを禁止いたします。　また、論文・コラムなどの内容を根拠として、自社事業や研究・実験等へ適用・展開を行った場合の結果・影響に対しては、いかなる責任を負うものでもありません。

ご利用になりたい場合は、当社ホームページの「お問合わせ」ページよりご連絡・ご相談ください。

Copyright © 2016 NTT Facilities Research Institute Inc.